

# 1 はじめに

## 1.1 研究背景

街にはイヤホンを耳にさし、音楽を聴いている人々が溢れている。筆者もその一人だ。移動中はスマートフォンにイヤホンをさし、音楽を聴いている。現代の日本は各々が自由に物事を選択でき、自分の好きな音楽を「携帯」し、自分だけで気軽にいつでも音楽を楽しむことができる社会、いわば音楽により人々が分断された「音楽個人化社会」である。しかし、そんな社会とは裏腹に近年、若者の間でより原始的な音楽行動であるフェスが興隆しているのだ。

「フェス」とは「フェスティバル＝祭り」の略語として現在、日本に浸透している。日本では古来より様々な祭りが開催されていたが、日本における近代の音楽フェスティバルの歴史も古く、六〇年～八〇年代には「日本ロック・フェスティバル」「BEAT CHILD」などの伝説的なフェスが既に開催されていた。そして、一九九七年山梨県富士天神山スキー場で二日間にわたり開催された第一回フジロックを皮切りに、様々な音楽フェスティバルが誕生し徐々に「フェス」という言葉が認知され「複数のアーティストが出演する野外や屋内で大規模に開催される音楽イベント」の総称として使われるようになった。今日のフェスの特徴としては、複数のステージでライブが同時進行されることが多い点にある。観客は目当てのアーティストを基に自分好みのタイムテーブルを組み、ライブを堪能した後はそれぞれ合間の時間を利用して休憩や食事をする、というように自らの選択によって行動する。いわばフェスは観客が主体的に楽しむ場である。それに対し、1つのステージのみで行われるライブやコンサートは最初から最後まで観客に選択肢はなく、いわば受動的に楽しむ場であるといえる。よって、フェスの観客はしばしば参加者と呼ばれる。たとえば、「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」のプロデューサーである渋谷陽一は、「出演アーティストでもなく、主催者でもなく、参加者が作り上げる、参加者が主人公の参加者のためのロックフェスティバル。それが ROCK IN JAPAN FESTIVAL です。」というように HP などで主張している。そしてもう一つの特徴として、フェスはコンサートやライブに比べて、渡辺の言葉を借りれば「軽やかな」聴取であるといえる。(渡辺祐 1989-2012:231) ライブやコンサートは1つのステージに集中して音楽を聴くのに対し、フェスは観客の移動は自由であるので、ステージを断片的に見て回ることも可能である。よって集中性を必要としない「軽やか」な聴取であるといえる。

また黎明期には「ロックフェス＝フェス」というあくまでロックのジャンルのみにカテゴライズされていたが、近年ではポップス、ヒップホップ、レゲエ、クラブミュージック、ジャズとあらゆるジャンルのフェスが開催され、さらには音楽に留まらず、「食フェス」「ご当地フェス」「ゆるキャラフェス」といった様々なイベントの総称としても使われている。ちなみに、ゲオホールディングスがゲオアプリ会員一万千四百九十三名を対象に二〇一八年に実施した「音楽フェスに関するアンケート」の中の「音楽フェス以外に興味のあるフ

フェス」の集計結果ではフードフェスが41.8%と一番人気である結果となった。次にビールフェス、ワインフェス、お酒フェスが13.9%、三位にアニメフェスが10.8%と並び、フード系フェスの人気が高いことが見て取れる。日本人は古来よりお祭り好きのためフェスの需要はますます増えていくと考えられる。今や「フェス」は文化として日本に根付いてきているのだ。

日本で四大音楽フェスと呼ばれるものは「FUJI ROCK FESTIVAL」、「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」、「RISING SUN ROCK FESTIVAL」、「SUMMER SONIC」である。AndMoreの「2017年フェス来場者数まとめ」の調査によると、それぞれの二〇一七年の動員数は「FUJI ROCK FESTIVAL」は四日間で十二万五千人、「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」は四日間で二十七万四千人、「RISING SUN ROCK FESTIVAL」は二日間で七万二千人、「SUMMER SONIC」は東京と大阪の二会場二日間で十五万人であった。エキサイト株式会社が二〇一六年に行った「日本四大夏フェスの比較調査」の中の年代比率調査では、各イベント情報をお気に入り登録しているAMIPLE利用者を、年代別に見た場合、四大フェス全てにおいて二十代の割合が一番高かった。（「ROCK IN JAPAN FES」は72%、「FUJI ROCK FESTIVAL」は55%、「RISING SUN ROCK FESTIVAL」は67%、「SUMMER SONIC」は63%である。）よってやはり、二〇代の若者にフェスが人気であることがわかる。

ぴあ総合研究所の試算によると、フェスの動員数は統計をはじめた二〇〇〇年には三十六万人だったものが二〇一六年には二三四万人にもなっている。（図1）また、コンサートプロモーターズ協会の統計によると、二〇一七年に日本国内でおこなわれた音楽公演は三万一千六百七十四件であり、公演数が前年より一八一二本増加している。追加分はホール（+六六本）とライブハウス（+二一七二本）が中心となっている。つまり、音楽業界は、デジタル化の潮流の中で、アーティスト本人の存在自体が重要となるライブ活動に収益の源泉を求めようになってきたのである。

図1 「音楽フェス市場の推移」

ぴあHP ([https://corporate.pia.jp/news/detail\\_fes\\_data20160630.html](https://corporate.pia.jp/news/detail_fes_data20160630.html)) より

もちろん、過去にもフェスやコンサートは開催されてきたが、「フェス」という言葉が浸透してきたのは近年のことであるし、二〇〇〇年から十六年間で約二百万人もフェスの動員数が増えているということは、現在の社会において「フェス」は音楽以外に、なんらかの社会的意味を持つのではないだろうか。各々が自由に音楽を楽しめるデジタル時代に、今なぜ今人々が集まる原始的なフェスの存在が大きくなってきているのか。若者の心理的背景との関連はあるのだろうか。これらを本研究では分析していきたい。

## 1.2 先行研究

### (1) 音楽と社会の関係

音楽を聴くという行為は本質的に社会的行為であるということについては様々な研究がなされてきた。フィリップ・A・ラッセルは音楽の好みと社会の関係は、特に社会的境遇やイデオロギーの次元で現れると指摘する。例えば、クラシック音楽への好みの中流上層階級でよりいっそう現れるといった傾向である。

また、音楽的な好みは、音楽に内在する特性と個人の心理的・社会的変数の相互関係だけで決まるのではなく、社会の圧力が好みに影響を及ぼすと、ルードルフ・E・ラドシーとJ・デーヴィッド・ボイル(1985)は指摘する。さらに「音楽の最も重要な機能は、社会の統合に対する貢献であろう。音楽は、まさに、諸個人を集団活動に参加するようすすめ、はげまし、ある場合にはほとんどそのことを要求さえする、社会現象なのである。」(ルードルフ・E・ラドシー、J・デーヴィッド・ボイル 1985:156)と音楽を社会現象として捉えている。また、「音楽以外の理由では、互いに接触しようとはしないであろう人々を、音楽は寄り集まらせ、集団活動をおこなわせる。音楽は、親密だが整然とした、しかも社会的に望ましいようなやりかたで、人々が相互作用するような機会を、提供するのである。」(同書:158)と、音楽のちからが集団において最大であると述べている。

### (2) 音楽文化の変容

北川純子(2008)は明治期以降の日本の音楽文化の変容を、四つの「軸」から考察している。まず一つ目の軸は「趣味」である。明治期以前から、日本や中国の楽器を演奏することは趣味の対象としてあり、一九五〇年代にはピアノを稽古事とすることが広まった。一九六〇年代にはギターも広まった。そして趣味としての音楽活動は演奏だけでなく、聴取も含み、時代ごとのメディアによって支えられてきたとされている。

二つ目の軸は「演奏機会」である。明治期は演奏機会の場としてストリートが重要な役割をはたしていたが、一九世紀末からは、「コンサート」が催されるようになった。しかし二〇世紀末から再び「ストリート」が浮上してきており、コンサートに関しては参加者の都合や好みによってゆるやかに切りとり、参加するようなものになってきている(同書:197)と述べているがこれはフェスのことを指していると推測できる。

三つ目の軸は「身体性」である。明治期に、身体性と関連した音楽の場の一例は運動会

である。現在でも運動会ではBGMとして音楽が使われる。また、明治期以前から踊りは音楽と身体性をもって密接に結びついてきた。一九二〇年代末からのダンスホールでは、生演奏が行われた。一九八〇年代のディスコでは、レコードを背景にして、また、一九九〇年代半ばからのクラブでは都市部の若者がDJプレイにより踊る姿が見られる（北川2008）と述べ、フェスについての身体性については述べられていない。

四つ目の軸は「飲食を伴う場」である。一九五〇年代の日本では、クラシック音楽を客のリクエストに応じて流す「名曲喫茶」やジャズのレコードを流す「ジャズ喫茶」などが隆盛をみた。一九七〇年代初頭にはカラオケが誕生し、当初は中高年男性による夜の酒場での付随的娯楽としての機能をもっていたが、一九八〇年代半ばに、「カラオケボックス」が誕生したことによって客層が広がったと、北川は指摘する。現在フェスにおいては屋台が出店され、飲食と深く結びついているがそのことは指摘されていない。

### （3） バウマンのクローク型共同体

ジークムント・バウマンは『リキッド・モダニティ』（2000）の中で、近代の液状化する社会の中でみられる爆発的共同体について言及している。その共同体は、「クローク型共同体」もしくは「カーニヴァル共同体」という。「クローク型共同体」という表現は劇場に集まる観客の集団を用いて表現している。人々は夜の公演になると集まり、コートを劇場のクロークに預ける。そして「公園中、すべての目、全員の注目は舞台にそそがれる。喜びに悲しみ、笑いに沈黙、拍手喝采、賞賛の叫び、驚きに息をのむ状況は、まるで台本にかきこまれ、指示されているかのように一斉におこる。しかし、最後の幕が降りると、観客たちはクロークから預けたものをうけとり…街の雑踏のなかへ消えていくのである。」（バウマン2000=2001:258）とその共同体の行動を記している。つまり、クローク型共同体は、ばらばらな個人が共通の見世物を通し一時的に関心が集められるが、見世物が終わるとあっという間に解散する爆発的な共同体であるという。

そしてバウマンは「個人」について、個人化社会にうまく適応し、「運命をみずから決定し、真の選択ができる個人」（同書：51）を「事実上の個人」、自身の意思にかかわらずその荒波に放り出された「形式上の個人」を峻別した上で「形式上の個人を待つ運命と、事実上の個人の運命のあいだの渡りきれない、あるいは、渡りきれるとはどうてい思えない割れ目から生じた苦痛を、沈静してくれるどころか、クローク型/カーニヴァル型共同体は、流体的近代に特有の社会的混乱の病理学的兆候に、そして、その要因にさえなっているのである。」（同書：260）と述べており、クローク型/カーニヴァル共同体は形式上の個人の個人の孤独な苦しみや事実上の個人になりたいという願望から形成されるという。つまり、バウマンは現代の祝祭を、個人の不安定性を意味するものとして位置づけている。そして「クローク型/カーニヴァル共同体は、社会性をもとめる衝動の未開発のエネルギーを集約するのではなく、拡散し、そして、まれな集団的強調、協力に、必死に、しかし、空しく救いをもとめる人間の孤独を永久化する。」（同書：260）と述べている。

#### (4) 永井純一「ロックフェスの社会学」(2016)

永井純一は一九九七年以降に増加した野外音楽イベント、フェスに注目し、その音楽文化的特徴や社会的背景を解き明かすことを目的に研究を行っている。永井はバウマンの「カーニヴァル」論とは異なる見解を示している。バウマンは「クローク型/カーニヴァル共同体は「ほんとうの」共同体の姿をまね、ほんとうの共同体をゼロからつくと約束しながら、実際には、そうした共同体の形成を妨害する。」(バウマン 2001:259-260) としているのに対して永井は現在のフェスにおいては、「一定の周期で再帰的に開催されているし、参加者はそのことに自覚的であるがゆえに、さまざまなフェスを渡り歩き、また「個人的な年中行事化」や SNS の利用によって、共同性をつなぎとめている。」(永井 2016:213) と述べている。そしてバウマンが「形式上の個人」の産物がクローク型共同体、つまり現在でいうところのフェスであると述べているのに対し、永井は現在のフェスにおける参加者は、一時的ではあるが「事実上の個人」になることができるという。つまりフェスは「社会的混乱の病理的兆候」の要因ではなく、「形式上の個人」の個人の「不幸」を緩和するものとして永井は捉えている。

#### (5) 不安

実存主義哲学では、キェルケゴール (1884=1979) が、「不安とは恐ろしいものへの熱望であり、共感的な反感である。不安は、個人を支配する性質の異なる力であって、人はそれを振り払うこともできないし、振り払う意志ももたない。なぜかという、人は怖がるが、しかし怖いものを熱望するからである」とし、明確な対象から派生するとされる恐怖とは異なり、不安の場合相互排他的な可能性のあいだの内部葛藤から起こることを指摘した。心理学では、山本誠一 (1988) はテスト不安の文脈で学習を妨げる不安、促進する不安の存在の研究を基に不安の二面性を指摘している。

#### (6) フェスへの参加要因

海外ではイベントマネジメントや観光の観点から、フェスティバルについての研究が盛んに行われている。近年のイギリスの動向について研究しているエマ・ウェブスターによると、もともとフェスにおいて重視されるのは「フェスティバル全体の雰囲気」で五三・二%で、「音楽全般」は二七・七%、「ヘッドライン・アクト」は一〇・一%であるという。(Webster 2014) また、アメリカのフェスにおいて調査を行ったヘザー・ボウエンとマーガレット・ダニエルズは、先行研究から九つの因子「ローカルな文化についての知識を高める」「コミュニティの人びとと一緒に過ごす」「新しいことを体験する」「多忙な生活ペースからのリカバー」「ライブをみる」「出演アーティストに感心がある」「家族や友人と時間を過ごす」「音楽以外のアトラクションを楽しむ」「パーティー」を抽出し、その分析結果から参加者を「社交」、「音楽以外の体験」、「音楽」、「すべて」の四つのクラスタに分類し

ている (Bowen and Daniels 2005)。このクラスタ分析で最も多かったのが「音楽以外の体験」で三六．四％である。この分類は音楽への関心が低く、知識や文化、コミュニティ、そして新しい自分を通じた発見を重要視するという。次に多かったのが「音楽」で三五．八％である。この分類は音楽への関心が高く、発見への関心が低いという。そして「すべて」は一四．四％、この分類はすべてのスコアが高いという。「社交」は一三．四％である。この分類はすべての変数が低く、とくに音楽に興味がない。家族や友人と時間を過ごしたり、音楽以外のアトラクションで遊ぶという特徴があるという。このようにフェスティバルに行く動機は多様化しており、音楽を楽しむことが必ずしも目的であるとは限らないのだ。

### 1.3 研究の目的

バウマン、永井の研究から、フェスへの参加者は「形式上の個人」なのか、「事実上の個人」なのかは曖昧で考察することは難しい。バウマンは劇場やカーニヴァルなどにいる不特定多数の人々のことを指してクローク型共同体と定義した上で、「形式上の個人」や「事実上の個人」について言及している。それに対し、永井はフェスに限定して参加者を調査した上で「形式上の個人」や「事実上の個人」にフェスの参加者を当てはめているので、両者の研究を比較することは困難である。また、両者とも量的調査ではない。そして、「フェスは、〈いま・ここ〉を楽しむために体験される。不確実で不安におおわれた現在と、不安定な自分を肯定するために」（永井, p. 216）とその不安定性などの定義が曖昧である。

ここで本研究では量的調査から、フェスと心理的尺度の関係を考察する。考察を行う上でまず「事実上の個人」「形式上の個人」の定義を明確にしておく必要がある。

「形式上の個人」は個人化の波に放り出されたままの状態であるため、「孤独感」・「不安」が強い傾向にある個人、と定義する。そして「事実上の個人」を運命を自ら決定し、選択ができるという点において、「独立意識」「充実感」が強い傾向にある個人、と定義する。そして、これらの「孤独感」「不安」「独立意識」「充実感」を独立変数として、フェスへの選好度にどう関連しているのか探っていくが、仮説としては以下の通りである。

仮説1 「孤独感」「不安」が高まるほど、フェスに行く傾向がある。

仮説2 「充実感」「独立意識」が高まるほど、フェスに行かない傾向がある。

これらの仮説が正しいか検証したい。そして永井は「ロックフェス」に限っていたが、今日ではロックフェスと呼ばれるものにもアイドルやJ-POPミュージシャンの出演がみられるので、本研究ではロックにこだわらず「音楽フェス」という大きなくくりで考察したい。

また、若者の音楽行動をフェスだけではなく他の音楽行動と双対比較して尺度を作成し、フェス行動はどのような傾向にあるのか考察する。そしてこれを従属変数として用い、各個人の心理の独立変数がどう影響していくかを分析していく。構成は、次の通りである。第2章では調査の概要、調査に使用した変数、方法について説明する。第3章では、単純集計、双対尺度法による尺度作成、重回帰分析の結果から考察する。そして第4章では、

本研究のまとめ、問題点について述べていくという構成である

## 2 方法

### 2.1 手順

調査時期は2018年11月、調査対象は全国の大学生男女116名である。調査方法はGoogleフォームを用いてSNSでの拡散やLINEを利用し、無記名で回答してもらう形をとった。そして尺度作成のために統計ソフトRを使用した。また、集計・分析のためにSPSS(ver.25)を使用した。

### 2.2 調査項目および分析に使用する変数

調査フォームの構成としては、音楽趣向に関する質問、音楽行動に関する質問、「抑制不安」を計る質問、「成長不安」を計る質問、「孤独感」を計る質問、「独立意識」を計る質問、「充実感」を計る質問に大きく分けられる。また、本研究では音楽行動に関する質問から尺度を作成し、従属変数としてあつかった。そして上記5つの心理的尺度を独立変数として分析を行う。

#### (a) 5つの心理的尺度

「抑制不安」「成長不安」は山本誠一(1988)によって作成された尺度を用いた。これらの尺度は個人の人的成長を促す不安と抑制する不安とを個別に測定する尺度で、相互に独立した個人内特性である。回答は「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の四つの選択肢から選んでもらい、左から順に四点、三点、二点、一点で計測した。

「孤独感」はRussel, Peplau&Cutrona(1980)らによって作成された孤独感尺度を、工藤力と西川正(1983)が翻訳した改訂版UCLA孤独感尺度を用いた。Peplau&Perlman(1979)は孤独感を、人間関係の中でわれわれがこうありたいという願望があるとき、その願望が十分に満たされなかったり逆に心理的な満足感を低下させるような結果が生じたときに感ずる感情の1つであると定義している。

「独立意識」は加藤隆勝・高木秀明(1980)によって開発された青年自身がつもつ独立意識の発達の変容をとらえるための尺度である。この尺度の中の尺度Iの項目「独立性」を用いた。

「充実感」は大野久(1984)が青年の充実感を青年の信頼、自立、連帯の3側面から測定した尺度である。大野(1984)は充実感とは青年が健康的な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情であると定義した。

「孤独感」「独立意識」「充実感」の回答は「当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の四つの選択肢から選んでもらい、同様に左から四点、

三点、二点、一点で計測した。各尺度毎に六つの質問項目を設け、その六つの合計得点を尺度として使用した。

### (b) 音楽行動の尺度化

音楽趣向の質問 (Q6) では、好きなアーティストのジャンルを「J-POP (アイドル以外)」、「男性アイドル」、「女性アイドル」、「ロックバンド」、「アニメ・ゲーム・声優」、「ヒップホップ」、「ブルース・カントリー」、「ハードロック・ヘヴィメタルバンド」、「ヴィジュアル系バンド」、「ダンス・エレクトロニカ」、「レゲエ」、「演歌・歌謡曲」、「ジャズ」、「クラシック」、「ソウル・R&B」、「その他」の16項目を設定した。

音楽行動に関する質問 (Q7) では、フェスとその他の音楽行動を双対比較するために、自分にとって重要であると思う音楽行動に1～7位で順位をつけてもらった。Q7の結果をもとに、音楽行動を双対尺度法により、尺度を作成した。作成の手順は以下の通りである。

まず、調査対象者に1. 「CDを買う」、2. 「ライブやコンサートに行く」、3. 「音楽フェスに行く」、4. 「アプリやストリーミングサービス (AppleMusic や Spotify など) を利用する」、5. 「クラブに行く」、6. 「カラオケに行く」、7. 「YouTube などの動画サイトでミュージックビデオを見る」、の7つから、何が自分にとって重要な音楽行動であるかを順位付けしてもらった。この順位を元に優勢度 (任意の項目が他の項目より選考された相対度数) 行列 E を作成した上で、双対尺度法を用いて数量化を行った。

西里によると行列 E に相当するものは次式によって与えられる。

データ行列 F は被験者×刺激で N 人の一人一人が n 個の刺激を 1 から n まで順位づける。この際 1 は最高 (第一選択) を意味するものとする。被験者 i が刺激 j に与えた順位を  $K_{ij}$  で示すと双対尺度法に必要な変換された行列 E、つまり一対比較データの場合

$$E=(e_{ij}) = (n+1-2K_{ij})$$

となる。

また、音楽行動に関する質問 (Q7) からフェスの順位が高いほど、点数が高くなるように値の再割り当てを行い、「フェス重要度」尺度を作成した。同様の手順の「CD重要度」「ライブ・コンサート重要度」も作成した。

この他にも、「ライブ」の重要度、つまり「生の音楽を聴きたい度」を測る質問 (Q8) では「CD やスマホで音楽を聴くよりも、ライブやフェスに行きたい」という質問に対し、「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の5つの選択肢を設け、左から順に五点、四点、三点、二点、一点を付け、「ライブ・重要度」の尺度を作成した。また、音楽における人とのつながりを問う質問 (Q9, 10, 11) をもうけた。

Q9では「アーティストのファン同士のコミュニティに属しているか」を問い、「属しており、ライブやフェス会場以外でも会う」「属しており、ライブやフェス会場のみで会う」



「属しているが、SNS上のやりとりだけ」「属していない」から回答してもらい、コミュニティのつながりの強さをはかった。

Q10では「音楽は人との交流において重要だ」から「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「あまり当てはまらない」の5段階から回答してもらい、音楽つながり度をはかった。

Q11では「ライブやフェスは誰と行くことが一番多いですか」という質問に対し、「大学や中学・高校の友人」、「アーティストのファン」、「1人」、「家族」、「恋人」、「先輩・後輩」、「ライブやフェスに行ったことはない」から回答してもらった。そして値の再割り当てを行い、「大学や中学・高校の友人」、「アーティストのファン」、「先輩・後輩」を一括して「友人」というカテゴリに再割り当てを行った。

### 3 結果と考察

#### 3.1 単純集計

調査対象者の性別内訳は男性が53名(45.7%)、女性が63名(54.3%)である。(図2参照) 学年の内訳は一年生が27名(23.3%)、二年生が13名(11.2%)、三年生が18名(15.5%)、四年生が57名(49.1%)、五年生以上が1名(1%)である。(図3参照)



図2 「調査対象者男女比」



図3 「調査対象者学年比」

調査対象者の現在の居住状況は実家が62.9%(73名)、下宿が31.9%(37名)、その他が5.3%(6名)である。

Q6の「あなたの最も好きなアーティストのジャンルを1つ選んでください。」の回答では、「ロックバンド」が38%と一番多くなった。(図4参照) ここでロックについて少し触れておきたい。かつてロック音楽とは反社会的とみなされ、カウンターカルチャーの代名詞であった。しかし、今の時代のロックは同じ言葉でもその性質は異なり、数ある音楽スタイルのひとつを表す言葉になっている。南田勝也(2014)は、かつてのロックのように新たなムーブメントは生じなくなった現在だが、それでも二〇一〇年前後には日本のガレージロックがリバイバルした動きがあった、と述べる。南田は具体例として「毛皮のマリーズ、

黒猫チェルシー、ザ・ボウディーズ、オカモトズ、とそれぞれ手法は異なるが、一九六〇年代～七〇年代の正統なロックに、オルタナティブ経由のアレンジを施したバンドたちが同時多発的に出現した」と主張している（『オルタナティブロックの社会学』p. 223 - 224）。今や「ロック」は若者の間でポピュラーな音楽としてとらえられ、フェスに出演するアーティストもロックバンドが多くを占める。

#### 図4 「好きなジャンル」

次に多かったのは「J-POP（アイドル以外）」であった。「J-POP」は一九九〇年代ごろから

音楽ジャンルの名称として使われはじめた言葉である。演歌や歌謡曲とは異なる、日本土着の要素を排除した、洋楽に近づいた音楽である。驚く結果となったのは3位に日本ではジャニーズが主流となっている「男性アイドル」と並んで「ヒップホップ」が入ったことである。ヒップホップは1970年代初頭に、ニューヨークのサウス・ブロンクス地区という貧困でドラッグにおぼれる人や、ストリート・ギャングが多い地区で生まれた。1970年代当時、世間ではディスコが大ブームだった。だが、貧困なアフリカ系アメリカ人の若者達は、ディスコに遊びに行くお金がない。そこで、彼らは公園に集まり家から運んできたターン・テーブル(レコード・プレーヤー)を、外灯のコンセントに差込み、DJがレコードを回すなかで始まったのがヒップホップだ。ヒップホップはMCing (ラップ)、DJing (DJ)、Writing (グラフィティ・アート)、Breaking (ブレイク・ダンス)の4つの要素を持つので、厳密には音楽のジャンルと定義することは難しいが、日本のCD売り上げで大きく割合を占める「男性アイドル」と並んで「ヒップホップ」が3位にランキングしたことは驚きだ。たしかに現在、日本ではロックバンドがメインのフェスにヒップホップグループが登場してきたり、マイアミで18万人を動員した、ヒップホップフェス<Rolling Loud (ローリングクラウド)>が“CROSS THE BORDER”をテーマに国境を越えて二〇一八年七月に日本に初

上陸した。ヒップホップもまた若者の間でメジャーになってきている。

Q11では「ライブやフェスは誰と行くことが一番多いか」という質問では、集計からライブやフェスに行ったことがある人は約87%（101人）もいることがわかった。（図5参照）ライブやフェスに行ったことがない人はわずか約13%（15人）で現在の日本の「ライブ重視型」音楽市場をよく反映しているといえる。また、ライブやフェスに行ったことがある人のうち、約90%（91人）の人が友人や家族、恋人など、誰かと一緒に行っており、（友人には、アーティストのファン、先輩、後輩も含まれる）1人で行っている人は約10%（10人）であった。インターネット時代の現在、SNSでつながることが主流となってきている一方、「ライブに行く」という行為は人との直接的な交流において重要なツールとなってきているのではないだろうか。

#### 図5 「誰とライブやフェスに行くか」

Q10の「音楽は人との交流において重要だ」という問いに対し、5段階で回答してもらった集計結果が図6である。結果、「当てはまる」「やや当てはまる」と答え人は75%（87人）となり、ほとんどの人が音楽は人との交流において重要なツールであるとみなしている。音楽を話題に会話がうまれたり、一緒にライブやフェスに行ったり、音楽の趣味が同じである同士の間には交流がうまれやすいのではないだろうか。永井は「今日のイベントにおいて映し出される共同性とは、「現実性」をもたず、イベントの参加者という点においてのみ共同しているとし、その共同性が続くことはない」と主張していたが、果たして本当にそうであろうか。

## 図6 「音楽は人との交流において重要か」

では、アーティストのファンのコミュニティ、音楽によるつながりとはどのようなものなのか、Q9の「アーティストのファン同士のコミュニティに属しているか」という問いに対する回答集計結果を見ていきたい。(図7参照) まず、約84%(97人)がコミュニティに属していないという結果になった。しかし、コミュニティに属している人(19人)のうち約74%(14人)が、「ライブやフェス会場以外でも会う」という強いつながりがある傾向にあることがわかった。よって、「アーティストのファン同士のコミュニティに属している人」は分母に対する割合は低いものの、そのコミュニティは音楽以外のところでもつながりをもたらすことだとわかった。これはバウマンの指摘するクローク型共同体とは異なる。クローク型共同体は演目が終わると、それまで共に感動を共有していた人々は散り散りになる爆発的な共同体であったが、現在はライブが終わったあとでもその共同体はつながりを持つのである。つまり爆発的な共同体ではなく、持続的な共同体であるといえる。よって、永井の主張とは異なる見解を筆者は示したい。SNSがコミュニケーションの主流となって直接的なコミュニケーションが減ってきている現代社会で、音楽による人とのつながりは直接的なものが多かったという結果は、音楽の聴取傾向がライブへと原点回帰しているのと同時に、コミュニケーションも直接的なものへと原点回帰しているということを示しているのではないだろうか。

図7 「アーティストのファン同士のコミュニティに属しているか」

### 3.2 双対尺度法を用いた考察

#### (a) 尺度の定義

CDを買う、2. ライブやコンサートに行く、3. 音楽フェスに行く、4. アプリやストリーミングサービス（AppleMusicやSpotifyなど）を利用する、5. クラブに行く、6. カラオケに行く、7. YouTubeなどの動画サイトでミュージックビデオを見る、の7つから、何が自分にとって重要な音楽行動であるかを順位付けしてもらった質問項目から、双対尺度法を用い、音楽行動の尺度化を行った。西里静彦（1982）の一対比較データの数量化をもとに、作成されたプログラム（付録参照）を統計分析ソフトRに投入し、尺度が得られた。

まず図8に二次元までの七つの音楽行動のカテゴリウェイト1軸対2軸を示す。

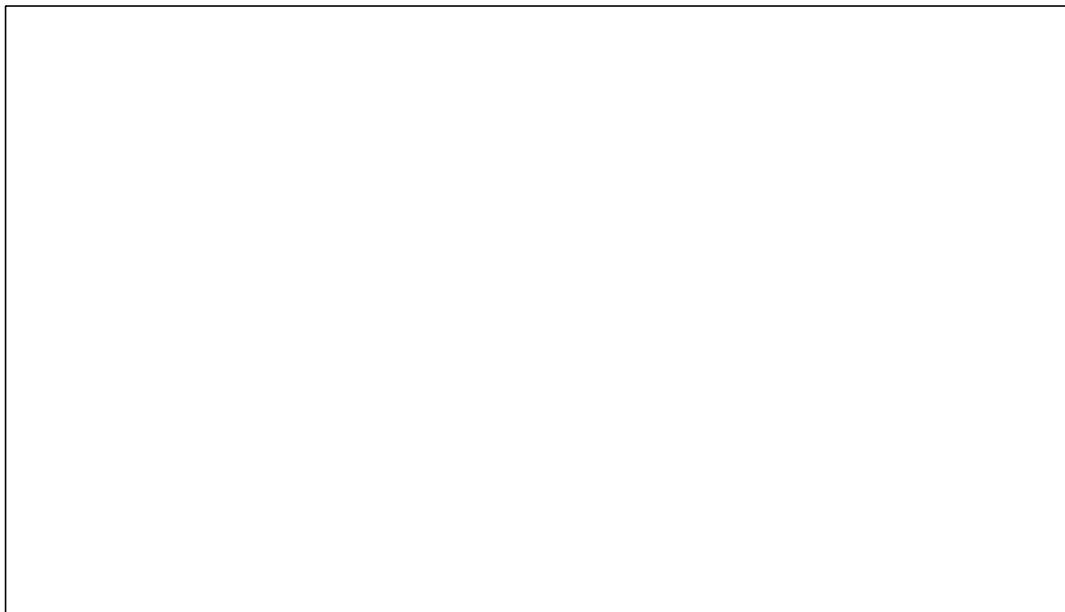


図8 「パリピ度 vs パッケージ度」

まず、1の横軸を検討してみる。得点の高い順に、「クラブに行く」(0.850511516)、「音楽フェスに行く」(0.264113306)、「カラオケに行く」(0.097154335)、「CDを買う」(0.086400839)、「YouTubeなどの動画サイトでミュージックビデオを見る」(-0.384113284)、「ライブやコンサートに行く」(-0.394084399)、「アプリやストリーミングサービス(AppleMusicやSpotifyなど)を利用する」(-0.48558727)となった。大まかな違いを比較してみると、点数の高い方は、「会話を伴う場」であるのに対して、低い方は「会話を伴わない」行動である。また高い方は、「誰かと行く」場合が多いと予測されるのに対し、低い方は「個人」で済む行動である。そして高い方は一対個人で音楽を楽しむという意味で「開放的」であるのに対して、低い方は一対個人で音楽を楽しむという意味で「閉鎖的」である。

これらを踏まえて、点数の高い方の尺度を「パリピ度」と定義する。パリピとは party people(パーティーピープル)を略した言葉である。「パリピ」は2015年「ギャル流行語大賞」で1位に輝くほど流行した言葉で、現在でも10代、20代を中心によく使われている言葉である。『パリピ経済・パーティーピープルが市場を動かす』(新潮社)の著者で博報堂ブランドデザイン若者研究所リーダーでもある原田曜平によると、パリピとは、賑やかでキラキラした集まり(クラブ、音楽フェスなど)に参加して大騒ぎするのが大好きな若者たちのことを指し、社交的でノリが良いのが特徴であるという。「クラブに行く」が一番点数が高く、

次に「音楽フェスへ行く」の点数が高い点、「会話を伴う場」「誰かと行く」「開放的」という要素を含むことから「パリピ度」と定義する。

次に2の縦の軸を検討してみる。点数の高い順に、「ライブやコンサートに行く」(0.537574)、「CDを買う」(0.384799)、「音楽フェスに行く」(0.261435)、「クラブに行く」(-0.13189)、「YouTubeなどの動画サイトでミュージックビデオを見る」(-0.25403)、「カラオケに行く」(-0.27504)、「アプリやストリーミングサービスを利用する」(-0.3107)となった。点数の高い方と低い方を比較してみると、点数の高いほど音楽が「パッケージ度」が高いといえる。ライブやコンサートは数時間という決められた時間の中で、アーティストは演目を設定しパフォーマンスする。観客ははじめから終わりまでその場所にとどまり、1つの完成されたステージを観ることになる。「CDを買う」もパッケージ化された音楽を手に入れている。「音楽フェスに行く」は、様々なアーティストが出演しており、観客の移動は自由であるが、「ライブやコンサート」が複数ある1つのステージといえるので、やや「パッケージ」の音楽であるといえる。反対に点数の低い方を見てみると、音楽が「断片的」であるといえる。「アプリやストリーミングサービスを利用する」は自分の好きな音楽を好きなときに好きな場所で聴くことができ、自由度が高い。気に入らないと思えばすぐに音楽を止めることができる。「YouTubeなどの動画サイトでミュージックビデオを見る」も同様である。「クラブ」はDJが音楽をつぎはぎし、客も出入りが激しいことから断片的であるといえる。よって2軸は「パッケージ度」と定義する。

次に1軸対3軸のカテゴリウェイトを図9に示す。

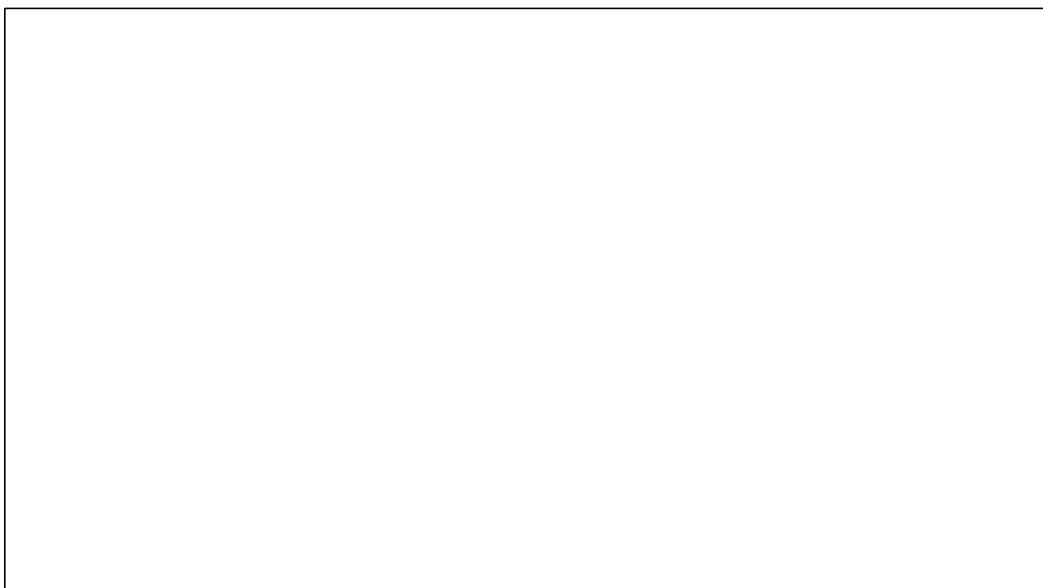


図9 「パリピ度 vs オタク度」

1軸は先ほど「パリピ度」と定義したので、3軸の検討を行いたい。3軸の点数の高い方から、「CDを買う」(0.34020666)、「カラオケに行く」(0.335297146)、「YouTubeなどの動画サイトでミュージックビデオを見る」(0.164096921)、「ライブやコンサートに行く」(-0.073234707)、「クラブに行く」(-0.125257976)、「音楽フェスに行く」(-0.265407854)、「アプリやストリーミングサービスを利用する」(-0.306500077)となった。まず、点数の高い方から検討してみると、「オタク度」が高いと推測できる。「オタク」とは人によって解釈が違うので、明確に定義はできないが、「ある趣味や事物に深く傾倒している人」と定義されることが多い。ここではアイドルやアニメ・ゲームに深く傾倒している人を「オタク」と定義することにする。「CDを買う」行動は男性、女性ともにアイドルのファンやアニメ・ゲーム・声優のファンが多い。実際、二〇一七年のオリコンのCDシングル売り上げ枚数ランキングでは一位から十位を女性、男性アイドルが共に独占している。また、「カラオケに行く」行動も、アイドルやアニメ・ゲーム・声優の「オタク」が好きなアーティストの音楽縛りで歌ったり、一切歌は歌わずアーティストのDVDをカラオケのプロジェクタールームにオタク同士で集まって見る、といった傾向にある。また、アイドルはライブ数が少ないため(ジャニーズのグループは一年間に一、二回程度でコンサートツアーを行う)YouTubeなどの動画サイトを活用することはファンにとって必須であり、アニメ・ゲーム・声優も同様に動画サイトの利用が主となる。

逆に点数の低い「アプリやストリーミングサービス」であるが、アイドルの中でもジャニーズの曲はストリーミングサービスの中に入っておらず、オタクの利用頻度は低いと推測できる。また、「音楽フェスに行く」も同様にフェスにアイドルや声優が出演すること

はほとんどないため、オタクにとって重要ではないと推測できる。以上から3軸を「オタク度」と定義する。

### (b) 3つの尺度の再検討

先ほど3つの尺度の定義を行ったが、果たして定義は正しいのか再検討するために箱ひげ図を作成し、再検討した。

まず、パリピ度を変数として好きなアーティストのジャンルをカテゴリ軸にし、箱ひげ図を作成した。(図10) この図から「ヒップホップ」、「ハードロック・ヘヴィメタルバンド」、「ロックバンド」を好む層はパリピ度の分布が多いことが見て取れる。これらのジャンルはフェスへの出演が多いジャンルである。また、ヒップホップはクラブで流れていることが多いジャンルである。よって、「フェスに行く」「クラブに行く」傾向のある1軸をパリピ度と解釈したことは正しいといえる。

図10 「好きなジャンルvsパリピ度」

次にオタク度の検討を行いたい。図11はオタク度を変数として作成した箱ひげ図である。この図から「アニメ・ゲーム・声優」「男性アイドル」の分布が多いことが見て取れる。意外にも女性アイドルの分布は男性アイドルに比べて少ない結果となった。しかし、「アニメ・ゲーム・声優」「男性アイドル」のジャンルは先ほど定義した「オタク」であるといえるため、3軸の「カラオケに行く」「CDを買う」傾向を「オタク度」と解釈したことは正しいといえる。しかし、「女性アイドル」のオタク度の分布は少なかったため、次の集計結果で再度検討したい。



図 1 1 「好きなジャンル vs オタク度」

先ほど、単純集計で「アーティストのファン同士のコミュニティに属しているか」(図 4 照)の結果があったが、ここで筆者はオタク度が高いほど、ファンコミュニティに属している傾向が高いのではないかと推測した。その理由としては、カラオケに行く傾向があるほどオタク度が高いと先ほどオタク度の定義をしたので、「オタク」はアーティストのファンコミュニティでカラオケに行っているのではないかと推測したからである。オタク度を変数として箱ひげ図(図 1 2)を作成すると、やはりファンコミュニティに属しているほど、オタク度の分布割合が多いことがわかった。以上から、3軸を「オタク度」と解釈したことは正しいといえる。

図 1 2 「オタク度vs音楽つながり度」

最後に、パッケージ度の検討を行う。「フェス重要度」と同様に変数に値を再割り当てして作成した「CD重要度」つまり「CDを買う」という行動が自身の音楽行動の中でどのくらい重要であるかを測る尺度とパッケージ度の相関分析を行った。(図1 1 参照) その結果、1%水準で有意差がみられ、正の相関(.630)があった。つまりCDを買うことを重要視するほど、パッケージ度は高いということになり、2軸をパッケージ度と解釈したことは正しいといえる。

(表1)「パッケージ度 vs CD重要度の相関」

		パッケージ度
CD重要度	Pearson の相関係数	.630**
	有意確率 (両側)	0.000
	度数	116
**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)		

### (c) 3つの尺度における性差

パリピ度、パッケージ度、オタク度において性差があるのか箱ひげ図で分析した結果が図1 3、図1 4、図1 5である。

まず、パリピ度においては男性の方がパリピ度の分布が高いことがわかった。

### 図1 3 「パリピ度 vs 性別」

次に、パッケージ度においては性差による分布の違いはほとんど見られなかった。

図14 「パッケージ度 vs 性別」

最後にオタク度においては女性の方が分布が高い結果となった。

図15 「オタク度vs性別」

以上により、男性は女性と比較した場合、誰かと行動を共にする音楽行動をとる傾向にあり、女性は男性よりもCDを買ったり、カラオケに行くなどオタク度が高い傾向にあることがわかった。

#### (c) 3次元での考察

では、3軸の解釈の整合性が得られたので、1軸「パリピ度」と2軸「パッケージ度」と3軸「オタク度」から作成した3D図(図15)から本研究の主題であるフェスについて考察していきたい。

図16 「オタク度 vs パリピ度 vs パッケージ度」

3D図からわかるのは「音楽フェス」はほぼ真ん中に位置するということである。「パリピ」でもなく「オタク」でもなく中庸であり、パッケージ度においても真ん中に位置する。これはリサーチクエスチョンとは異なる結果になっているのではないだろうか。「フェスに行く」人はなんらかの社会的特性があるのではないかと推測したが、分析結果からわかるのは「フェスに行く」人は大きな特性はないといえる。つまり、大学生の心理的尺度もフェスになんら関連していないのではないだろうか。この考察は正しいのか次にSPSSを用いた分析を見ていきたい。

### 3.3 重回帰分析、ロジスティック回帰分析を用いた考察

まず、「ライブ重要度」を従属変数、5つの心理的尺度とパリピ度、パッケージ度、オタク度を独立変数とした場合の重回帰分析の結果を見ていきたい。パッケージ度のみ1%水準で有意に、正の相関(0.441)がみられた。つまり、「パッケージ度」の高い音楽行動を取るほど、ライブやフェスなどの生の音楽を重要視するということであるが、これはややバウマンの「クローク型共同体」を示しているといえる。クローク型共同体は、ばらばらな個人が共通の見世物を通し一時的に関心が集められるが、見世物が終わるとあっという間に解散する爆発的な共同体であるというバウマンの指摘であるが、ここで言い換えれば「クローク型共同体」はパッケージ度が高いといえるのではないだろうか。

この分析ではその他の独立変数には有意差がなく、相関しているとはいえない。つまり生の音楽を重要視するかは心理的尺度と相関があるとはいえない結果になった。

では、ほかの従属変数を用いた分析結果を見ていきたい。

(表2)「ライブ重要度」を従属変数とした重回帰分析の結果

	標準化係数	標準誤差	有意確率
(定数)		1.381	***0.002
抑制不安合計得点	0.046	0.038	0.698
成長不安合計得点	0.035	0.041	0.711
孤独感合計得点	-0.146	0.042	0.110
独立意識尺度合計得点	-0.157	0.044	0.202
充実感合計得点	0.058	0.044	0.671
パリピ度	0.082	0.518	0.336
パッケージ度	0.441	0.337	***0.000
オタク度	-0.147	0.462	0.102
***p<0.01, **p<0.05, *p<0.10			

次にQ.11の「ライブやフェスは誰と行くことが一番多いですか?」という質問に対しての「ライブやフェスに行ったことはない」という選択肢をダミー変数に変換し、「フェス参加有無」尺度(行ったことない=1、行ったことある=0)にした上で、5つの心理的尺度、パリピ度、パッケージ度、オタク度を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。その結果を示したのが図8である。

まず孤独感では、10%水準で有意に、正の相関(0.302)がみられた。つまり、孤独感が強いほどライブやフェスには行ったことがある、という結果である。これは先行研究からうまれた仮説と一致する結果である。孤独感が強いほど、共同体を求めフェスに行くのではないだろうか。

次に、パッケージ度で、1%水準で有意に、強い負の相関(-4.517)が見られた。これはつまり、パッケージ度が高い音楽行動を取るほど、ライブやフェスに行ったことがあるということである。この結果は先ほどの図7で得られた結果と合致している。図7と図8で得られた結果を合わせると、「パッケージ度が高い音楽行動を取るほど、ライブやフェスを重要視し、実際ライブやフェスに行く傾向にある。」ということである。

次にオタク度において、5%水準で有意に、正の相関(3.721)がみられた。これはつまり、オタク度が高いほど、ライブやフェスに行ったことがないということである。これは、オタク度の定義をしたときに推測した結果と合致している。

この分析では5つの心理的尺度において、孤独感以外に有意差が見られなかったため、「フェス参加有無」と心理的尺度に相関があるとはいえない。

(表3)「フェス参加有無」を従属変数としたロジスティック回帰分析

	標準化係数	標準誤差	Exp(B)	有意確率
抑制不安合計得点	0.130	0.109	1.139	0.235
成長不安合計得点	-0.035	0.164	0.965	0.829
孤独感合計得点	0.302	0.157	1.353	*0.055
独立意識尺度合計得点	-0.037	0.128	0.963	0.771
充実感合計得点	0.131	0.144	1.140	0.362
パリピ度	-3.833	2.776	0.022	0.167
パッケージ度	-4.517	1.371	0.011	***0.001
オタク度	3.721	1.826	41.309	**0.042
定数	-11.419	5.035	0.000	**0.023
***p<0.01, **p<0.05, *p<0.10				

図17の分析から孤独感とフェスの参加には正の相関があることがわかったが、ここでライブやフェスに行く相手をカテゴリ軸とした孤独感分布（図18）を見てみたい。すると、1人でライブやフェスに行くことが多い人とライブやフェスに行ったことがない人が孤独感が高い傾向にあることがわかった。行ったことがない人が孤独感が高い傾向にあることは先ほどの分析と一致する。また、1人で行く人の孤独感が高い傾向にあることもわかった。

図17 「孤独感合計得点 vs フェス・ライブに誰と行くか」

先ほど、表2において、「ライブ」重要度を従属変数として、従属変数にした結果、5つの心理的尺度に有意差が見られず相関があるとはいえなかった。そこで今度は本研究の主題である「フェス重要度」を独立変数とした重回帰分析を行った。（表4参照）すると、5つの心理的尺度においては独立意識のみ10%水準で有意差がみられ、弱くはあるが負の相関（-0.176）が見られた。これはつまり、独立意識が高まるほど、フェスを重要視しない傾向にあるということである。これは仮説と一致する。他人に依存せず、独立意識を持っているということは集団に群れないでいることが苦ではないので、大勢の人々と感情を共有するフェスというものも重要視しないということではないだろうか。

また、パリピ度パッケージ度オタク度においては、1%水準で有意差がみられた。まず、パリピ度では正の相関（0.390）がみられた。つまりパリピ度が高いほど、ややフェスを重視するということである。これは先ほどの双対尺度法を用いた分析の結果と一致する。

次にパッケージ度においても、正の相関（0.463）がみられた。つまりパッケージ度が高い音楽行動を取るほど、フェスを重視するということである。これも先ほどの双対尺度法を用いた分析結果と一致する。

最後にオタク度においては、負の相関がみられた。これはつまりオタク度が高まるほど、フェスは重視しないということである。これも先ほどの双対尺度法を用いた分析と一致する。

この分析においては、独立意識において相関がみられたが、その他の心理的尺度においては有意差がなかったため、相関があるとはいえない結果となった。

(表4) フェス重要度を従属変数とした重回帰分析の結果

	標準化係数	標準誤差	有意確率
(定数)		1.204	***0.000
抑制不安合計得点	-0.081	0.033	0.329
成長不安合計得点	0.061	0.036	0.352
孤独感合計得点	0.027	0.037	0.674
独立意識尺度合計得点	-0.176	0.038	*0.040
充実感合計得点	-0.021	0.039	0.820
パリピ度	0.390	0.451	***0.000
パッケージ度	0.463	0.293	***0.000
オタク度	-0.536	0.402	***0.000

\*\*\*p<0.01, \*\*p<0.05, \*p<0.10

では、フェスではなく、ライブやコンサートではどうだろうか。フェス重要度と同様に「ライブ・コンサート重要度」を変数の値の再割り当てから作成し、同様の独立変数を用いて重回帰分析を行った。その結果が表5である。こちらでも5つの心理的尺度のうち独立意識のみにおいて10%水準で有意差がみられ、の正の相関(0.108)があった。これはつまり、独立意識が高まるほどライブやコンサートを重要視するということである。フェス重要度においては負の相関がみられたのに対し、ライブ・コンサート重要度においては正の相関がみられ、両者の性質の違いが明らかになった。ライブやコンサートは1人でも行くことができるのに対し、フェスは誰かと行動を共にするということに、独立意識の差がみられたのではないだろうか。また、パリピ度、パッケージ度、度オタク度においては、1%水準で有意差がみられた。まずパリピ度においては負の相関(-0.185)がみられたが、これはつまりパリピ度が高まるほどライブやコンサートは重要視しないということであり、これもフェスとは逆の関係である。パッケージ度においては強い正の相関(0.896)がみられたが、これはつまり、パッケージ度が高まるほどライブやコンサートを重要視するということであり、フェスよりも強い相関があることがわかった。最後にオタク度においては弱い負の相関(-0.111)がみられたが、これはつまりオタク度が高まるほどライブやコンサートは重要視しないということである。ただし標準化係数の値が小さいため、必ずしも相関があるとは断定できない。

(表5) 「ライブ・コンサート重要度」を従属変数とした重回帰分析

	標準化係数	標準誤差	有意確率
(定数)		0.881	***0.000
抑制不安合計得点	-0.049	0.024	0.376
成長不安合計得点	-0.046	0.026	0.295
孤独感合計得点	-0.025	0.027	0.548
独立意識尺度合計得点	0.108	0.028	*0.060
充実感合計得点	-0.101	0.028	0.112
パリピ度	-0.185	0.330	***0.000
パッケージ度	0.896	0.215	***0.000
オタク度	-0.111	0.294	***0.009
***p<0.01, **p<0.05, *p<0.10			

## 4 結論

筆者は以下の2つの仮説をもって若者の心理とフェス行動の関連を研究した。

仮説1 孤独感、不安感が高いほどフェスに行く傾向がある。

仮説2 独立意識、充実感が高いほどフェスに行かない傾向がある。

分析の結果、フェスへの参加有無を従属変数としたとき、まず孤独感において相関がみられ、孤独感が高いほどフェスへの参加経験があることがわかった。よって「孤独感が高いほどフェスに行く傾向がある」という仮説1は孤独感においてのみ認められるといえる。

また、独立意識においても相関がみられ、「独立意識が高いほど、フェスを重要視しない傾向にある」という結果が得られた。よって「独立意識が高いほど、フェスに行かない傾向がある」という仮説2は独立意識においてのみ認められるといえる。独立意識においては「ライブ・コンサート重要度」においても相関がみられ、フェスとは反対に、「独立意識が高いほど、ライブやコンサートを重視する」という結果が得られた。これはフェスとライブ・コンサートの性質の違いを表す結果となった。つまり、フェスというものはばらばらな個人が集まった1つの共同体であり、現代社会において若者の孤独感を紛らわせたり、癒したりする共同体なのではないだろうか。

そして調査対象者に音楽行動を重要な順位に並べてもらった結果を双対尺度法により尺度化した結果では、「フェスに行く」行動はパリピ度、オタク度、パッケージ度の3つの尺度においてパリピ度がやや高いものの、3つのスコアにおいて平均的であり、中庸なものであることがわかった。よって、フェスは社会的特性がある行動とはいえなかったものの、中庸なものであるからこそフェスは現在、若者に愛され、メジャーなものとして広がって



いるのではないだろうか。つまり、フェスという場所は孤独な若者、またそうでない者も受け入れる調和のとれた世界なのではないだろうか。

ただし、本研究では、不安、充実感においては有意差が認められなかったため、相関があるとはいえず、仮説を完全に採択することはできなかった。本研究の問題点としては2点あげられる。まず、バウマンのいう「形式上の個人」「事実上の個人」への変数の割り当てが不十分であったことである。不安や充実感のほかにもっと当てはまる変数を再検討し、当てはめて分析するか、もしくは、同じ「不安」や「充実感」でも異なる性質をもつ他の尺度を使用すれば、相関が得られたのかもしれない。また、二点目としては優位性を得ることができなかった点である。調査サンプル数は一一六であったため、標本数を増やす余地があると考えられる。

以上により、若者の心理と音楽行動に考察してきたが、今後も日本におけるフェス市場は拡大していき、多くの若者にとって「フェス」とは心地よい「居場所」となっていくのではないだろうか。そしてデジタル時代にこそ、その魅力を発揮する「フェス」は日本における新たな文化なのである。

## 参考文献

- Bowen, Heather E. and Margaret J. Daniels 2005 “Does the music matter? Motivation for attending a music festival,” *Event Management*, 9(3)155–164
- 福田達夫・磯部二郎・沖野成紀・小柴はるみ・佐藤典子訳, 2004, 『人はなぜ音楽を聴くのかー音楽の社会心理学』東海大学出版会
- ヘンリー・レイノア, 1990, 城戸朋子訳『音楽と社会—1815年から現代までの音楽の社会史—』音楽之友社
- J・デーヴィッド・ボイル、ルードルフ・E・ラドシー, 1985, 徳丸吉彦/藤田芙美子/北川純子『音楽行動の心理学』音楽之友社
- 加藤隆勝・高木秀明, 1980, 『青年期における独立意識の発達と自己概念との関係』教育心理学研究, 28, 336-340
- 工藤力・西川正之, 1983, 『孤独感に関する研究(1) —孤独感尺度の信頼性・妥当性—』実験社会心理学研究, 22, 99–108
- 永井純一, 2016, 『ロックフェスの社会学』ミネルヴァ書房
- 南田勝也, 2014, 『オルタナティブロックの社会学』共栄書房
- 西里静彦, 1982, 『質的データの数量化—双対尺度法とその応用』, 朝倉書店
- 小川博司, 1988, 『音楽する社会』勁草書房
- 大野久, 1980, 『現代青年の充実感に関する研究(1)』日本教育心理学会第22回大会発表論文集, 548–549
- 小塩さとみ・月溪恒子・北川淳子, 2008, 『現代社会における音楽』放送大学教育振興会
- 渡辺裕, 1989=2012, 『聴衆の誕生—ポスト・モダン時代の音楽文化』中央公論新社

Webster Emma, 2014 “Association of Independent Festivals :Six Year Report 2014”  
Association of Independent Festivals.

山本誠一, 1988, 『青年期における不安の二側面—「成長不安」と「抑制不安」の検討』筑  
波大学修士論文

ジグムント・バウマン, 2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ—液状化する社会』大  
月書店

## URL

AndMore! 2017 「2017年フェス来場者数まとめ」

(<https://andmore-fes.com/50625/>)

エキサイト株式会社, 2016 「日本四大夏フェスの比較調査」

(<http://corp.excite.co.jp/press/amiple20160812/>)

ぴあ総研, 2016 ([https://corporate.pia.jp/news/detail\\_fes\\_data20160630.html](https://corporate.pia.jp/news/detail_fes_data20160630.html))

## 資料 音楽行動尺度化／双対尺度法スクリプト

```
A <- read.csv("data")
A
K <- data.matrix(A, rownames.force=NA)
K
n_dim <- 2
n_col <- ncol(K)
n_row <- nrow(K)
n_col
n_row
One_m <- matrix(rep(1:1, times=n_row), nrow=n_row, ncol=1)
One_n <- matrix(rep(1:1, times=n_col), nrow=n_col, ncol=1)
One_m
One_n
E <- (n_col+1) * One_m %*% t(One_n) - 2*K
E
# Calculate ft
```

```

N <- nrow(E) # No. of Subjects
n <- ncol(E) # No. of Stimuli
ft <- N*n*(n-1) # Obtain ft (?????????)
# Obtain Hn matrix
Hn <- (t(E) %*% E)/(N*n*(n-1)^2)
# Eigen Decomposition of Hn
Eigen.Results <- eigen (Hn)
# Create Eigen value vector rho2 and delta value vector
rho2 <- Eigen.Results$values # rho2 contains eigenvalues
tr_Hn <- sum(diag(Hn))
Delta <- 100*rho2/tr_Hn
# Prepare rho2 related statistics
stats <- matrix(1:8, nrow=2, ncol=4)
count <- c(1,2)
for (i in count)
{
  stats[i,1] <- rho2[i]
  stats[i,2] <- sqrt(rho2[i])
  stats[i,3] <- Delta[i]
  stats[i,4] <- acos(sqrt(rho2[i]))*180/pi # discrepancy between row and col. space
}
stats_t <- t(stats)
r.names <- c('rho^2', 'rho', 'delta(VAF)', 'theta (discrepancy angle)')
stats.out <- data.frame(stats_t, rownames=r.names) # stats.out contains stats
# Create Rescaled Eigen Vectors so that x'x=n
X <- sqrt(n)*Eigen.Results$vectors # Nishisato(1980, p130)??, X being normed
# Obtain nrmd.X from normed column weights
nrmd.x1 <- X[,1]
nrmd.x2 <- X[,2]
nrmd.X <- cbind(nrmd.x1, nrmd.x2) # rho2.X contains normed col. weights
# Obtain rhoX to obtain rho scaled column weights
rho.x1 <- sqrt(rho2[1])*X[,1]
rho.x2 <- sqrt(rho2[2])*X[,2]
rho.X <- cbind(rho.x1, rho.x2) # rho2.X contains rho weighted col. weights
# Prepare Column weights output
Col.weights <- cbind(nrmd.X, rho.X)

```

```

#Rescaled.Eigen.vectors <- sqrt(ft)*Eigen.Results$ectors# ????(1982, p93)??
# Obtain y1 and y2 vectors and bind them to creat nrmd.Y
Ex <- E %*% X # Numerator for (4.19)
nrmd.y1 <- Ex[,1] / (sqrt(rho2[1])*n*(n-1))
nrmd.y2 <- Ex[,2] / (sqrt(rho2[2])*n*(n-1))
nrmd.Y <- cbind(nrmd.y1, nrmd.y2) # Y contains normed subject weight sets
#Obtain rho.Y from rho.y1 and rho.y2

```

```

rho.y1 <-sqrt(rho2[1])*nrmd.y1
rho.y2 <-sqrt(rho2[2])*nrmd.y2
rho.Y <- cbind(rho.y1, rho.y2)
#Create Row weights output
Row.weights <- cbind(nrmd.Y, rho.Y)
# End of Program

stats.out
Col.weights
Row.weights

write.table(Col.weights, file="Col.weights_3items_include_missing.csv", sep=",")
write.table(Row.weights, file="Row_weights_3items_include_missing.csv", sep=",")

```